

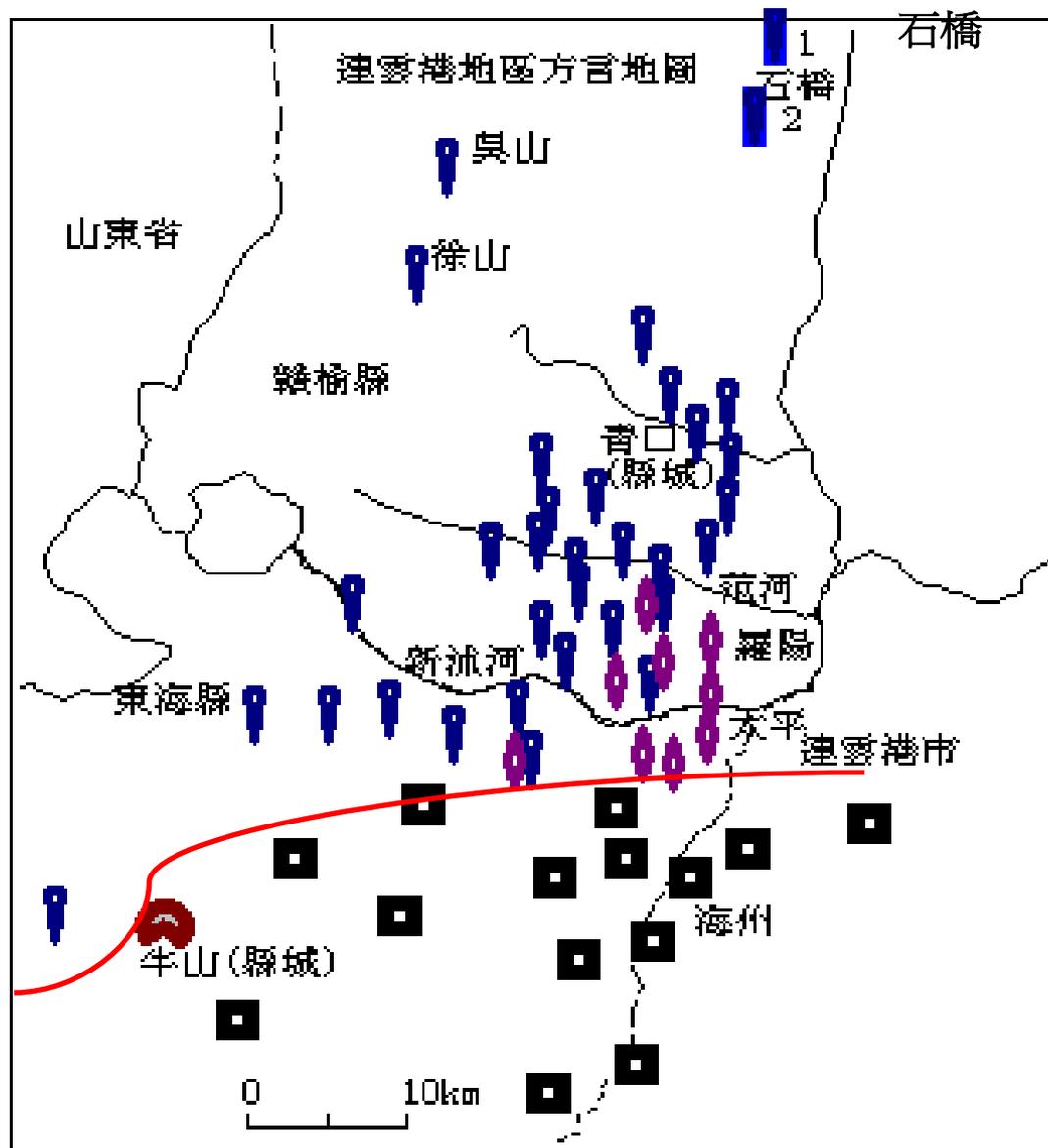
『中日理論言語学 国際フォーラム2013』

シンポジウム「地理方言学研究的展望」 2013年7月14日、同志社大学

音韻体系はいかに伝播するか？－ 河川沿いの言語伝播について

岩田 礼（金沢大学）

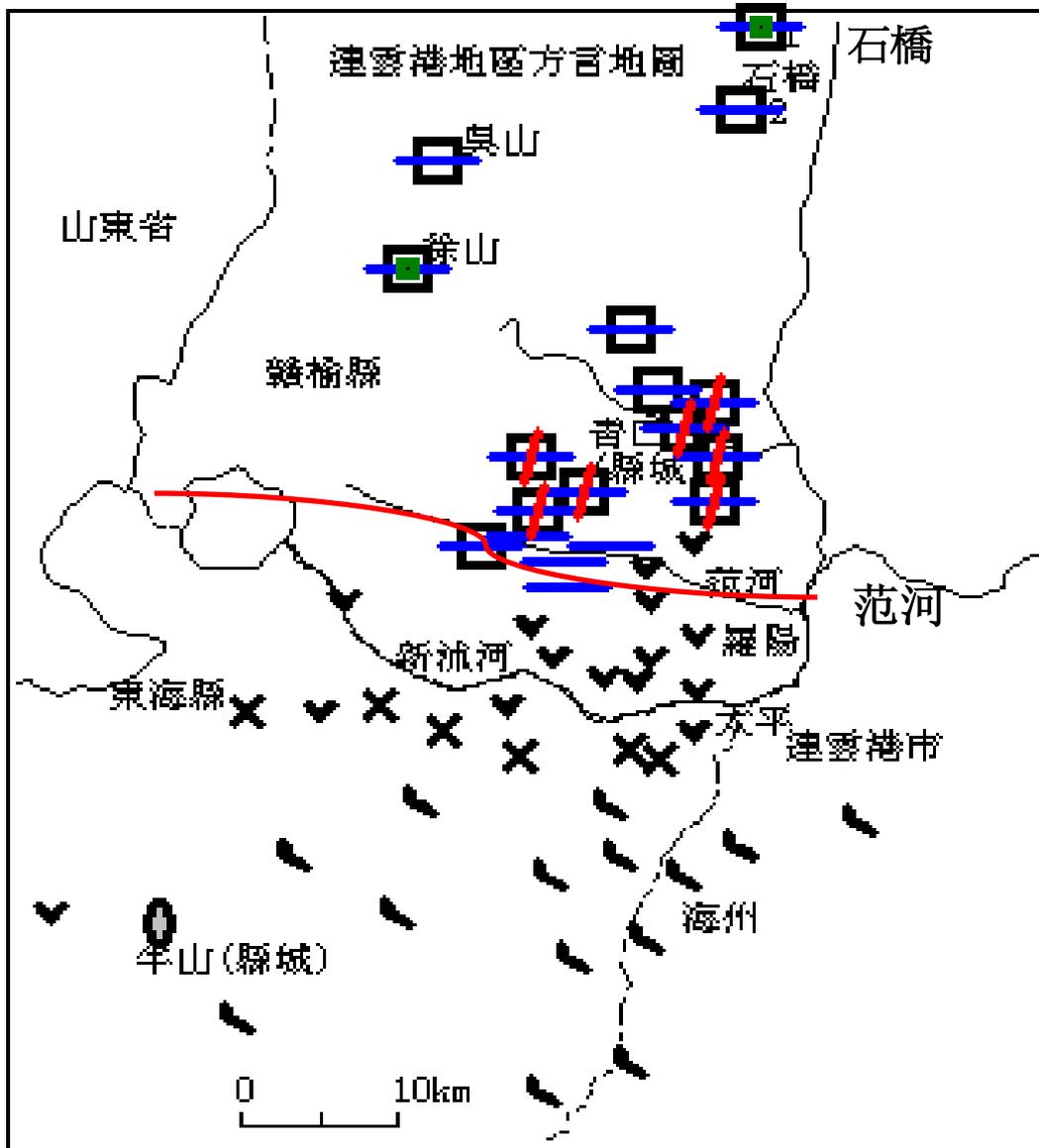
1. 小規模河川が言語伝播を阻害することがある



- 徐州型古(北部)
- 徐州型新
- 徐州型古(南部)
- 南京型
- 揚州型

声調体系

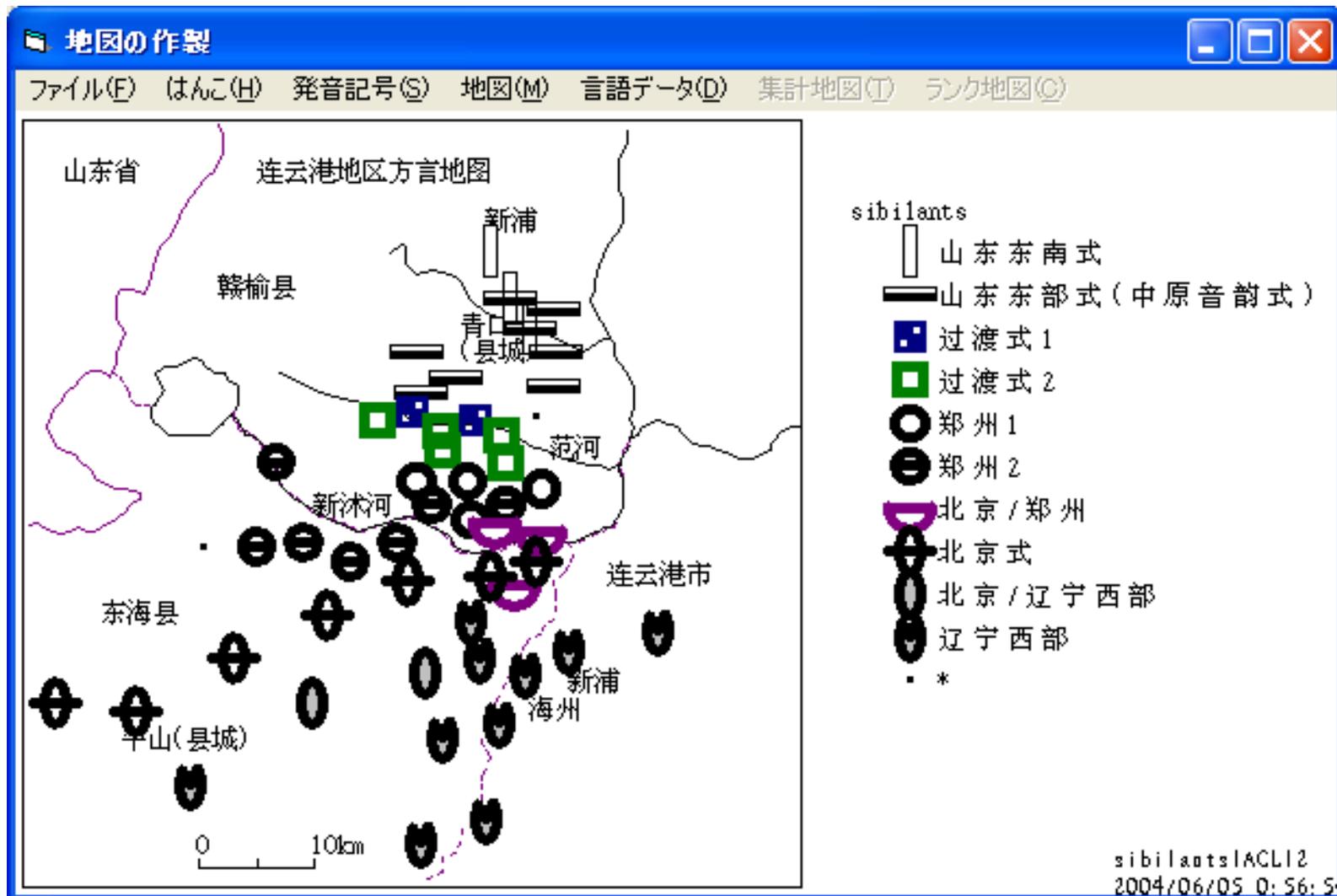
上上變調 (3声變調)



- 上聲>41 / ____ 上聲 (上上變調)
- 陽平>41 / ____ 上聲
- - - 陽平>41 / ____ / 陽平
- 陽平趨向高降化 / ____ 無條件
- ∨ 陽平≠上聲>55 / ____ 陰平、上聲
- × 陽平55 : 上聲35 (不變調)
- ∩ 陽平=上聲>55 / ____ 無條件
- 上聲>32 / ____ 陽平、去聲

上聲的單字調值是升調 (324or35)。

声母体系



2. 大河は言語伝播を促進する(ことがある)

1) 大運河沿いの分布

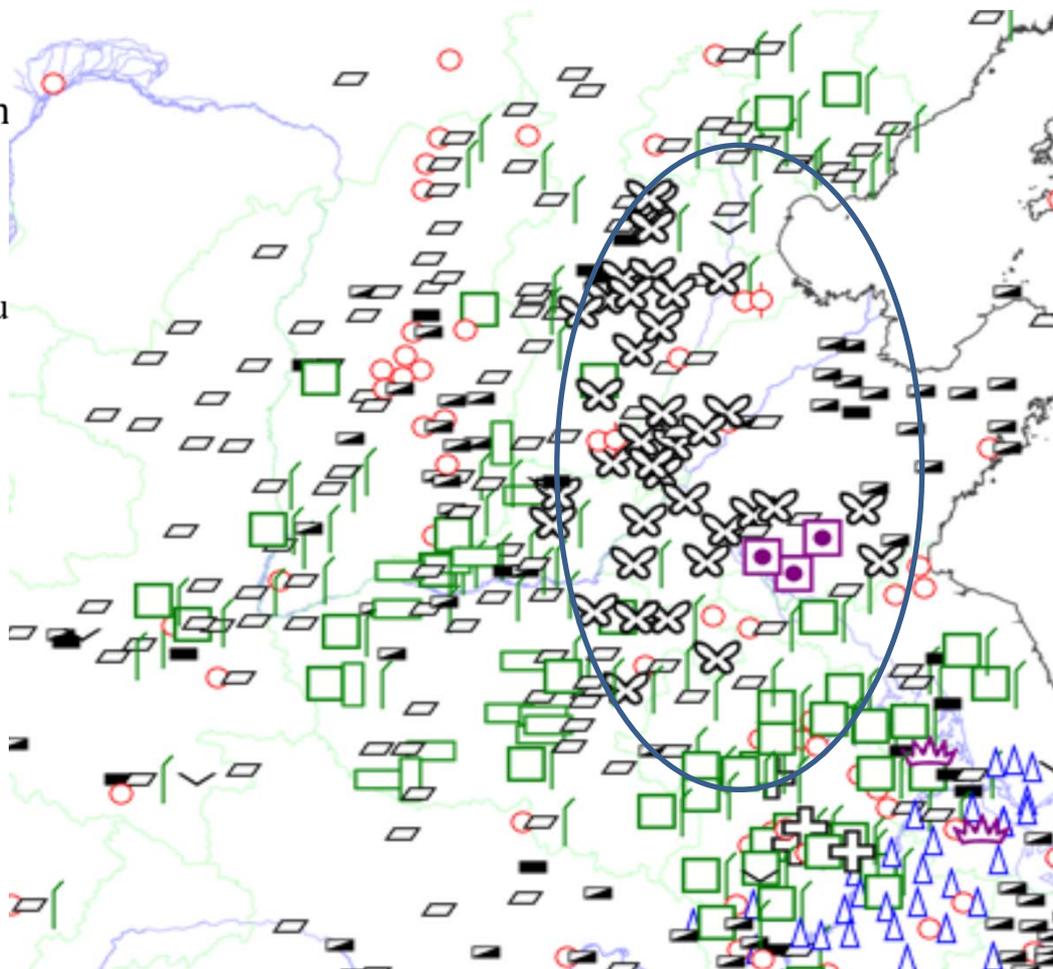
✕ B-1 过明 guoming, 过了明 guolem

⊕ B-2 货个 huoge, 号个 haoge

□ 后 hou (单音节), 后个 houge, 后子 hou

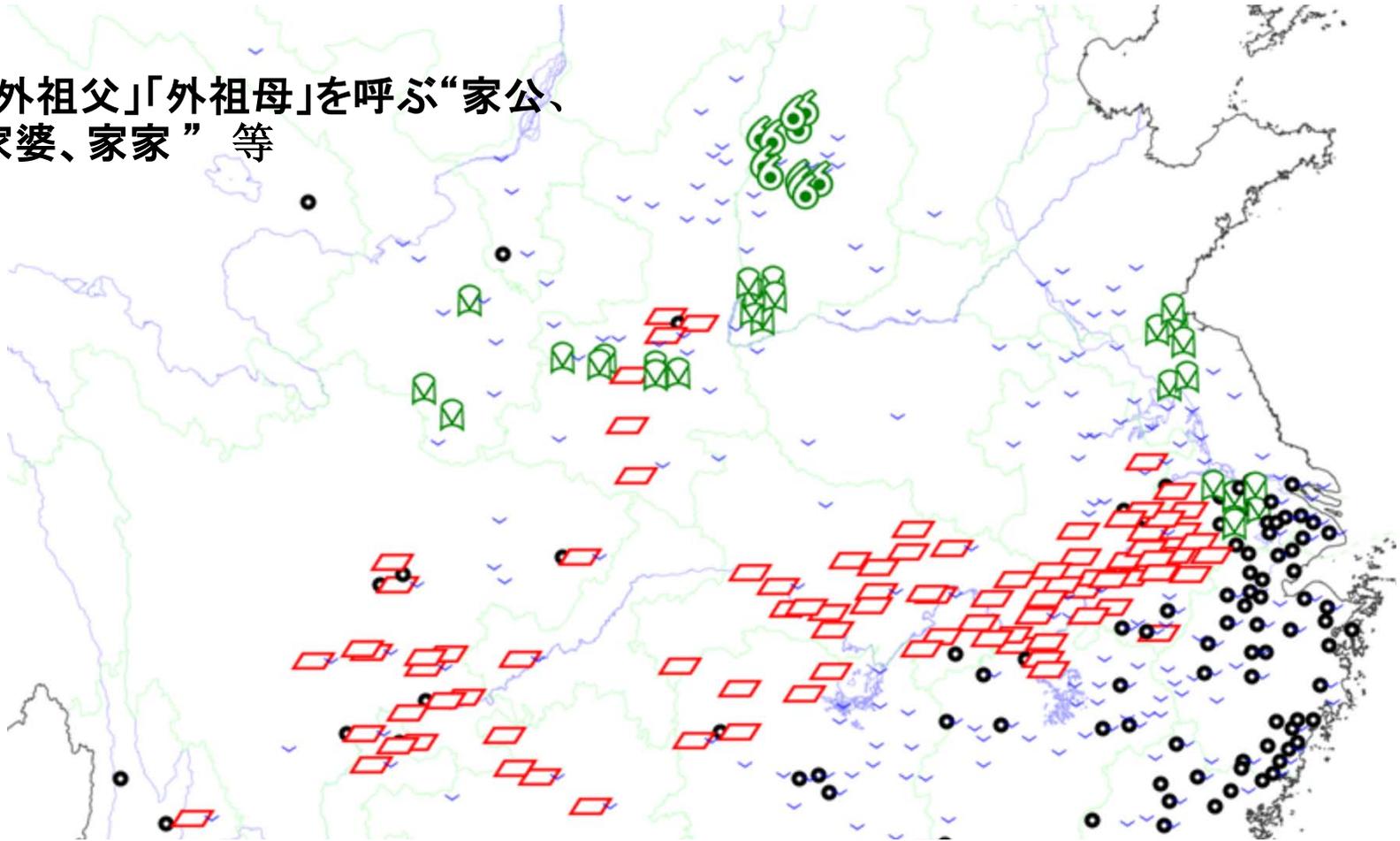
▢ 后一儿 houyir, 后一个 hoyige

▮ 后夜 houye

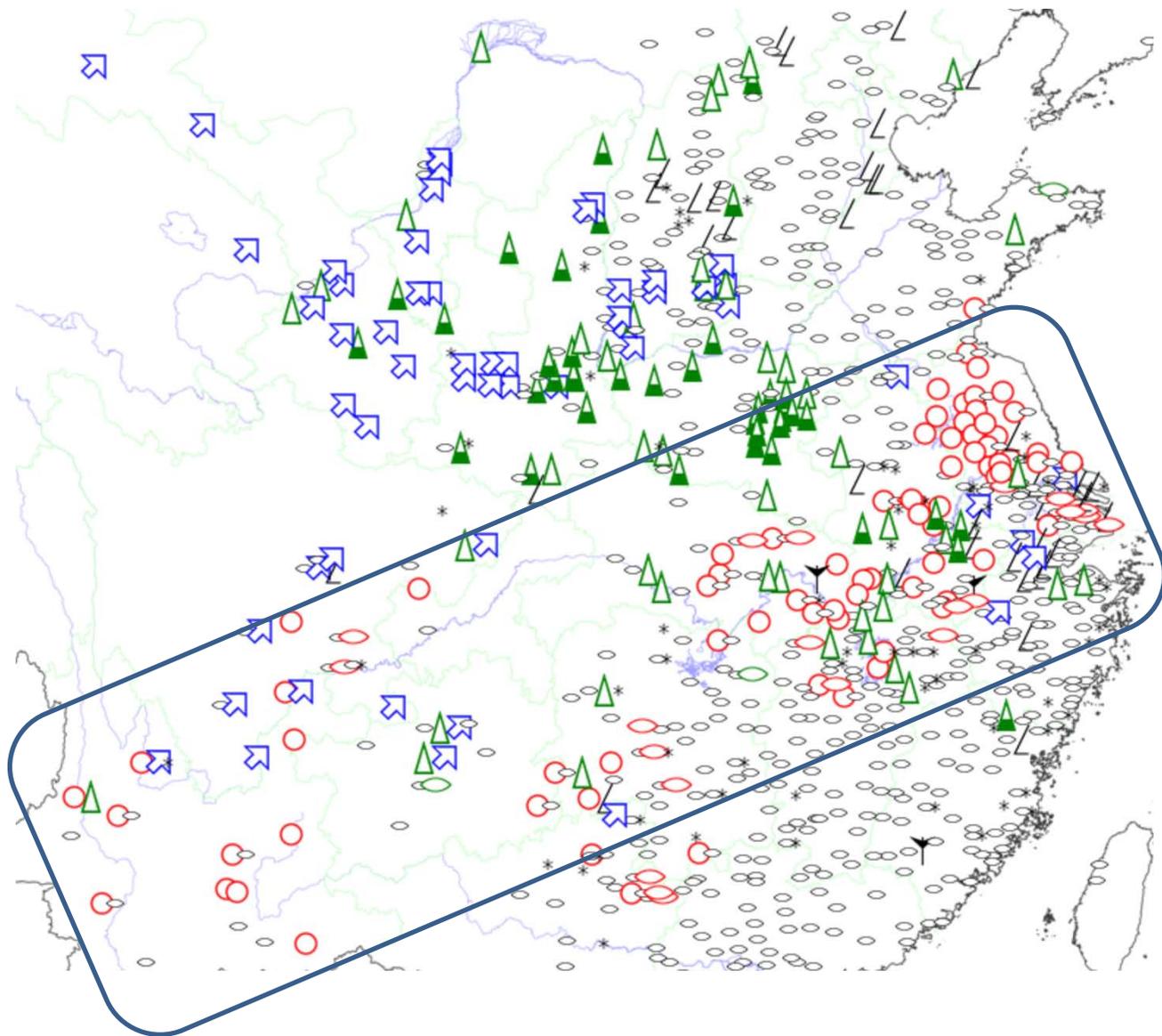


2) 長江型分布(1): “楚型”

「外祖父」「外祖母」を呼ぶ“家公、
家婆、家家”等



2) 長江型分布 (2): 「叔父」を呼ぶ語幹



A. 叔 shu

○ 叔, 叔叔, 阿叔

B. 爷 ye

○ B-1 爷, 爷爷, 细爷

○ B-2 叔爷, 爷叔

C. 爹 die

△ C-1 爹, 小爹, [ka] 爹

△ C-2 [ta] 阴平, 阳平

○ C-3 叔爹

D. 爸 ba

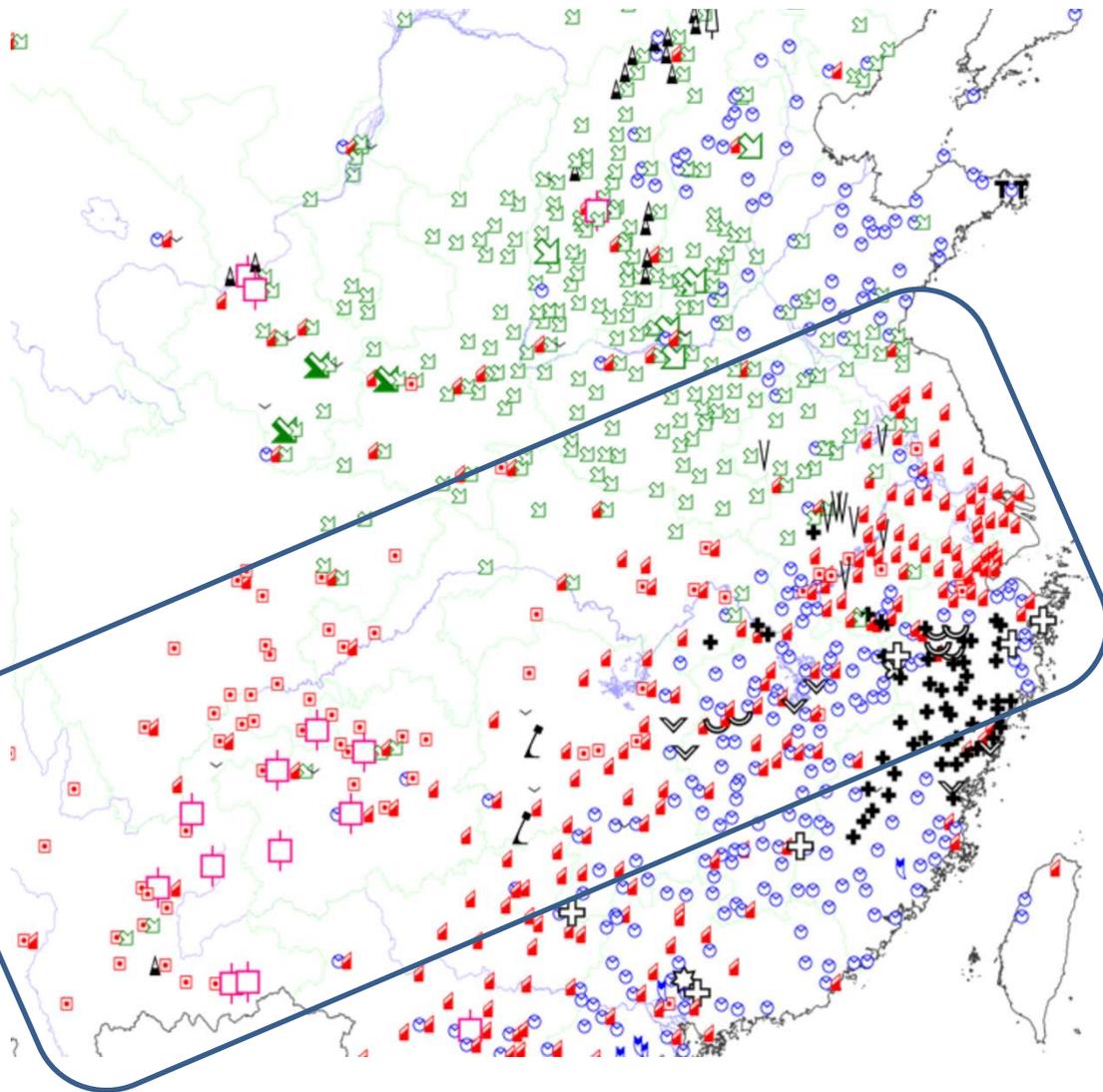
⋈ 爸

F. 其他

∠ F-1 伯, 伯伯, 小伯, 叔伯

⋈ F-2 父

2) 長江型分布 (3): 「雹」を表す語形



A. 雹 bao- (无修饰语 /no modifiers)

⊙ A-1 雹 bao(单音节), 雹子 baozi, 雹里 baoli

♣ A-2 t^hɔk, ts^hɔk, hak (单音节 /monosyllabic)

B. 冰 bing-

♠ 冰雹 bingbao, 冰排 bingpai, 冰片 bingpian etc.

C. 雪 xue-, 白 bai-

◻ C-1 雪雹子 xuebaozi, 雪弹 xuedan etc.

◻ C-2 白雨 baiyu, 白雪 baixue etc.

D. 冷 leng-

◻ D-1 冷子 lengzi, 冷蛋 lengdan etc.

◻ D-2 凉雨 liangyu

◻ D-3 硬雨 yingyu

◻ D-4 琉璃蛋 liulidan

3. “船運式”伝播の意味

1. 言語特徴は大河沿いに伝播する。
2. 言語特徴は船によって港から港へ運ばれる。
(因って伝播速度は、“徒歩式”伝播(村から村への地伝い伝播)より早い。)

*これは比喩的表現に過ぎない。

3. 港(泊)ができる→町ができる→町を起点として地域経済圏(後背地)ができる。交通網・流通経路ができ、それに伴う人の移動によって言語特徴が運ばれる。

4. 伝播によって運ばれるもの

1. “空運式”伝播(移民のよる言語伝播)は、方言総体をA地からB地に運ぶが、“徒歩式”、“船運式”伝播によって運ばれるものは言語を構成する個々の要素である。ここに項目別地図集(特徴地図)作成の意義がある。
2. 語彙形式や文法形式は、語彙体系や文法体系の制約を受けながらも、個々に伝播することが容易である。一方、音韻的特徴は、一般に体系の制約を強く受けるので、単一音韻特徴の伝播は困難である。→個々の音韻特徴を地図にしても伝播や通時的変化の様相は見えてこない。

5. 音韻体系の伝播(1): 上上(3声)変調の場合

- 上上変調の広域的分布は通時的にしか説明できない。
 1. 北方のある地域(中核地域)において上声は現在の北京語のような低調であり、その連続が異化を起こした結果、次のような変調規則が出来た(平山説)。

上声 [low] → 陽平 [rising] / _____ 上声 [low]
 2. 当該方言はある種の“調値体系”を有していた。
 3. その後、上声の調値は他調類の調値とともに変化した¹が、形態音韻規則 ($\{\text{上声}+\text{上声}\} \rightarrow / \text{陽平}+\text{上声} /$) は維持され、継承された。
 4. この規則は当該調値体系とともに伝播していった。

“伝播”の実態



Prestigious dialect

声調体系B: 3声変調なし

陰平 55 > 53

陽平 213 > 35

上声 31 > 213

去声 35 > 55

平山環流説に基づく内的変化

声調体系A: 3声変調あり

陰平 53

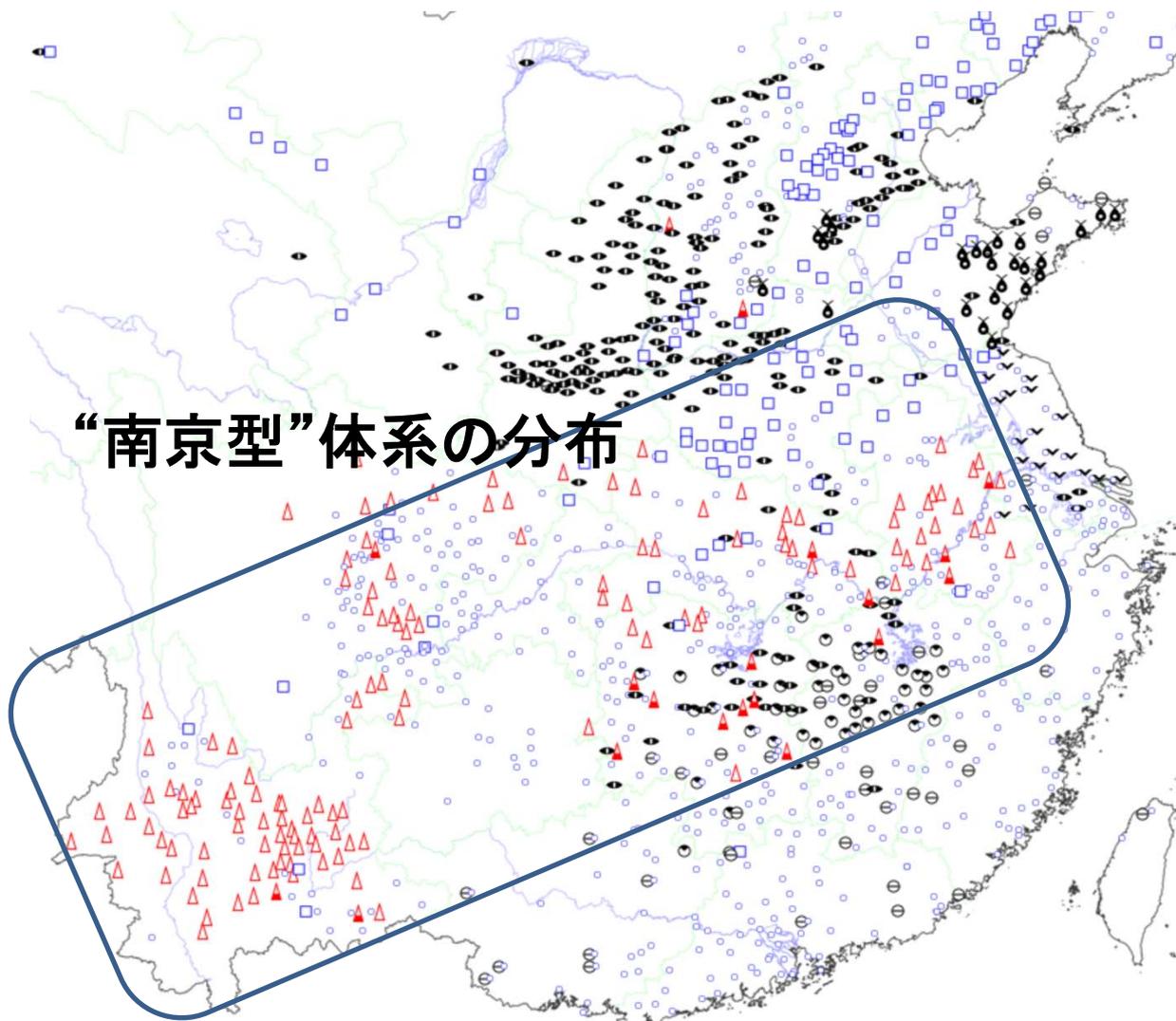
陽平 35

上声 213 → 陽平/___上声

去声 55

声調体系A[53, 35, 213, 55]/B[55, 213, 31, 35]が隣接分布

6. 音韻体系の伝播(2): 声母体系の場合



- ♂ 山东型
- ◐ 西安型
- ⊖ 南方Ⅰ型
- ◉ 贛湘型
- ▲ 老南京型
- ▲ 新南京型
- 北京型
- 南方Ⅱ型
- ∨ 江苏型

“南京型”とは？

- A. 2等/3等 区別あり
 - A-1 山东型: 2等 $t\zeta$ / 3等 $t\zeta i$ Proto-type
 - A-2 西安型: 2等 ts / 3等 $t\zeta$
 - A-3 南方I型: 2等 ts / 3等 $t\zeta$ (无 $t\zeta$)
 - A-4 贛湘型: 2等 ts / 3等 t (无 $t\zeta$)
- B. 後続主母音: 広母音/狭母音
 - B-1 老南京型: 2等 $t\zeta$ (広)、 ts (狭) / 3等 $t\zeta$
 - B-2 新南京型: $t\zeta$ 只出现在 i 和 ə 之前
- C. 2等/3等 区別なし
 - C-1 北京型: 2等 $t\zeta = 3$ 等 $t\zeta$
 - C-2 南方II型: 2等 $ts, t\zeta = 3$ 等 $ts, t\zeta$ (无 $t\zeta$)

“南京型”は“西安型”と“北京型”の混合体系か？

分布特徴：“南京型”の北側には“北京型”が、南側には“西安型”（及び“贛湘”型）が分布する。因って、“南京型”は“西安型”と“北京型”の混合体系であった可能性がある。

解釈1： 当時、長江流域の方言は“北京型”だった。生=声[ɕəŋ]（“南京型”では生[səŋ] ≠ 声[ɕəŋ]）

解釈2： 当時、長江流域の方言は“西安型”だった。生[səŋ] ≠ 声[ɕəŋ] 産[san]（“南京型”では[san]）

*いずれの解釈も成立せず。因って混合体系ではない。

“南京型”は“山東型”を前身とし、南京周辺で生まれた。

*山東型： 2等tɕ / 3等tɕi

例： 生[ɕəŋ] / 声[ɕiəŋ] 狭母音

産[ɕan] / 閃[ɕian] 広母音

1. 狭母音の前でのchain shift

声[ɕiəŋ] > [ɕəŋ] → 生[ɕəŋ] > [səŋ]

2. 広母音の前でのmerger

閃[ɕian] > [ɕan] = 産

“南京型”は、その後長江中上流地域に伝播し、長江型分布が形成された。

- 1) 当時、長江流域の全域に“山東型”が分布していた。
- 2) “南京型”の伝播は南京周辺を起点として、ドミノ倒し方式で進んだ。
- 3) 但し下記二つの可能性を排除しない。
 - *外部的影響を受けず、自立的に山東型＞南京型の変化が起きた地点もありうる。
 - *雲南の“南京型”は、江淮地域からの移民が直接もたらした可能性がある。但しすべてがそうであったわけではない。また湖北、四川の“南京型”は、移民説では説明できないだろう。

文献

- 平山久雄 **2005** 《平山久雄语言学论文集》，北京，商务印书馆。
- 岩田礼編 **2009** 《漢語方言解釈地図》，白帝社。
- 岩田礼編 **2012** 《漢語方言解釈地図 続集》，好文出版。
- Iwata, Ray 2000. "The Jianghuai Area as a Core of Linguistic Innovation and Diffusion: A Case of the Kinship Term "ye_爺"", *In Memory of Professor Li Fang-kuei: Essays of Linguistic Change and the Chinese Dialects*, University of Washington/ Academia Sinica.
- 岩田 礼、苏晓青 **2004** 〈矫枉过正在语音变化上的作用〉，《语言教学与研究》**109** (2004年第5期)。
- 岩田 礼 **2007** 〈長江流域におけるSibilants声母体系の一類型〉，《佐藤進教授還暦記念中国語学論集》，好文出版。

文獻 (續)

- 岩田礼**2012** 〈聲調調值演變的微觀探討：以江蘇東北角的方言為例〉，鄭錦全編《語言時空變異微觀》(《語言暨語言學》專刊系列之四十九)，中央研究院語言學研究所。
- Shi, Feng (石鋒). 1999. A tone sandhi in Chinese northern dialects. *Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics*, ed. by Shigeki Kaji, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
- 熊正輝 **1990** 〈官話區方言分ts,tʂ的類型〉，《方言》**1990**年第**1**期。